



MOT  
MUSEUM CONTEMPORARY TOKYO  
OF ART  
東京都現代美術館



# DAVID HOCKNEY

ユース向け



# デイヴィッド・ ホックニー展 鑑賞ガイド



2023.  
7.15 sat - 11.5 sun

東京都現代美術館 企画展示室 1F/3F



# デイヴィッド・ ホックニー

1

ってどんな人？



デイヴィッド・ホックニーは1937年、イギリス中部にある工業都市、ブラッドフォードで生まれました。16歳から20歳まで地元の美術学校に通った後、22歳から3年間、ロンドンの王立美術学校で学びました。それから60年以上にわたり、絵画、版画、写真、映像などの作品をつくってきました。制作のために世界各地へと旅をしながら、イギリスのロンドン、アメリカのロサンゼルス、そしてフランスのノルマンディーにスタジオを構え、現在は主にノルマンディーで制作しています。日本にはこれまで何度も訪れていますが、それはホックニーの日本の美術や中国の絵巻物への関心にもつながっています。「世界をどのように描くか」を追求するため、「絵」について幅広く研究してきたホックニーは、新しい材料や技法にも興味を持って実験を重ねてきました。iPadもそのひとつで、本展ではこれを使って描かれた作品も見ることができます。



# 2

1964年にロンドンからロサンゼルスに移住した  
ホックニー。イギリスとは異なる、からりとした気  
候のもとで描き始めたのは、太陽に照らされた  
プールの水面、芝生に降りそそぐスプリンクラー  
の水しぶきなど、絶え間なく動き続ける水と光の  
目ではとらえきれない一瞬の姿です。ホックニー  
はこのとき、新しく手に入るようになったアクリル  
絵の具を使い、その特徴を活かして、建物やプー  
ル<sup>あざ</sup>を平たく、鮮やかな色で描いています。ほかに  
も、さまざまな版画の技法や、2010年に手に入  
れたiPadを使って、ホックニーは水や光に満ちた  
風景を描いてきました。絵の中の季節や時間帯  
だけでなく、描く方法によっても表情を変える水  
と光に注目してみてください。

UNITED KINGDOM

イギリス



変化する  
光と水を描く

# 親しい人々を描く

ホックニーは、家族や恋人<sup>こいびと</sup>、友人など、周りにいる親しい人々をモデルに、多くの肖像画<sup>しょうぞうが</sup>を描いてきました。その代表作のひとつ《クラーク夫妻とパーシー》では、こちらを見るホックニーの友人ふたりの姿が、ほぼ等身大で描かれています。描き始めてから1年ほどかけて完成したこの作品、室内は写真やスケッチをもとに描き、後ろにある窓から入る光の効果や、画面の左下にあるテーブルの配置などを工夫して、絵の中の空間を自然に表現しようとしました。一方、夫妻を描くのに苦しんだホックニーは、ふたりに何度もスタジオでポーズをとってもらったそうです。ホックニーはこの作品で、何よりもふたりの関係を描きたかったと語っています。



《クラーク夫妻とパーシー》1970-71年 テート

ふたりの表情やポーズ、位置を観察してみましょう。それぞれのどのような気持ちを読みとれますか？



# 3

ここに描かれているユリは「純潔」や「母性」などを表し、猫は「気まぐれ」や「奔放さ」を象徴すると言われています。

ふたりのどのような物語が想像できますか？

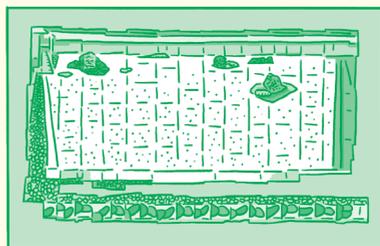


ひとつの視点から、  
絵画や写真でよく使われる  
遠近法で描くとこんな感じ  
(線遠近法ともいいます)。

ホックニーは1983年、京都の龍安寺<sup>りょうあんじ</sup>にある石庭を訪れました。そして、縁側<sup>えんがわ</sup>を少しずつ歩いて移動しながら、足元<sup>へい</sup>から順番<sup>は</sup>に100枚以上の写真を撮って貼り合わせました。なぜそのようなことをしたのでしょうか。ホックニーはこの作品で、遠近法<sup>いど</sup>に挑んだのです。私たちがよく知っている遠近法では、手前にあるものほど大きく、遠くにあるものほど小さく表現されます。たとえば、この長方形の庭を正面から1枚の写真に撮ると台形に映ります。

## さまざまな視点で眺める 4

しかし人が肉眼で見るときには、この庭は台形ではなく長方形だと理解するはずで。そこでホックニーは、写真でも肉眼で見えるようにこれを表現できないかと考えました。そして、そのためには撮る人の視点が動く必要があると気づいたのです。そうやってできたこの作品には、庭<sup>はし</sup>の端<sup>か</sup>から見ると隠れてしまう石も写っています。また、下のほうにあるホックニーの足元は、1枚の写真ではとらえることができない動きや、過ぎゆく時間を表しています。ホックニーはここで、複数の視点から見たものを、ひとつの平面で表現する面白さを発見したのです。



《龍安寺の石庭を歩く 1983年2月、京都》  
1983年 東京都現代美術館

視点をずらしながら撮った  
写真を貼り合わせた  
ホックニーの作品



# 5 身のまわりの

# 風景を見つめて

ホックニーはこれまで何度も「春の到来」をテーマにした作品に取り組んできました。2011年に描いたシリーズ〈春の到来 イースト・ヨークシャー、ウォルドゲート 2011年〉に含まれる、32枚のキャンバスを組み合わせた油絵は、ホックニーが見た春の風景を、スタジオで思い起こしながら描いたものです。地面いっばいに芽吹く草花や、小道の向こうから吹く風に舞いあがる新葉が、ダイナミックに表現されています。一方、iPadで描いた作品は、ホックニーが冬の終わりから夏の始まりにかけて、毎日同じ場所に出かけて描いたものです。刻々と変わる光と色を、iPadを駆使して素早くとらえた風景の数々は、鮮やかな季節の移り変わりを見せてくれます。もうひとつの大作《ノルマンディーの12ヶ月》もiPadで描かれたものです。制作のヒントになったのは、ノルマンディーの歴史的な物語を描くため、11世紀に作られた70メートルの刺繍画「バイユーのタペストリー」です。ホックニーが1年を通して描き続けた庭の景色をつなげたこの作品は、90メートルにもなります。歩きながらその季節の変化や時間の流れをたどってみてください。



バイユーのタペストリー

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館、読売新聞社

監修：崔敬華、楠本愛（東京都現代美術館） 編集：坂井若葉

デザイン・イラスト：やまねりょうこ

許諾のない複製、転載、転用を禁じます。

© Museum of Contemporary Art Tokyo, The Yomiuri Shimbun